

群馬を拠点に活動するアーティストの川松康徳と京都芸術センターが共同で主催する本展覧会「Body Buddy Baby」は、「身体と実存」をテーマにしています。乳幼児 (Baby) が自らの身体 (Body) を起点に他者や世界と絆 (Buddy) を結ぶように、川松を含む4名のアーティストたちは、本展で、自らの身体を起点に世界を捉え返そうとします。展示のほか、パフォーマンスやレクチャーも実施します。ぜひお楽しみください。

**出展アーティスト** 本展覧会情報やイベント情報を各作家のインスタグラムを通じてシェア配信しています。  
出展アーティストのインスタグラムアカウントをフォロー頂き、展覧会情報を含め、過去の作品などもご覧ください。

吉川 永祐

@eisu\_ke\_



高橋 順平

@taka.0\_0.jun



内田 望美


@uchidanozomi




川松 康徳

@kawamatsuyasunori



 本展覧会は展示作品の撮影が可能です。SNS等に投稿する際は、#**BBB**をつけて、作品の魅力をシェアしてください。

 **オーディオガイド**

展覧会では、各作品の近くに、身体を基準とした作品の見方を示すオーディオによるガイドバイアスが設置されています。それは作品の見方を案内するよりも、特定の基準に照らし合わせ、むしろ鑑賞者の認知を誘導するものとなってしまうでしょう。その認知バイアスをすり抜けて、独自の身体を見つけることができるでしょうか？  
会場マップの  マークの場所にあるオブジェなどに身体や耳を近づけて、耳を澄ませてみましょう。

※耳の不自由な方、あるいは聞き取りづらかった方のために、オーディオガイドのテキスト版が用意されています。  
会場内の監視員までお声掛けください。

# 身体から逃走することはできない、なぜなら最後に残るのは身体だから。

■関連プログラム1

## AIRdabada 「壁の向こう側／階段と会談」

AIRは、さまざまな場所を一時的に放送室に変化させ、発話／談話を含む「声」から場を発生させるプロジェクトです。目指すのは、非評価的環境で、プライベートと公共／共用が溶け合う場で生まれる「問いかけ」になること。

壁の向こう側にある階段は、1階でも2階でもない。どちらでもないその場所を使わずに、上にも下にも行くことはできない。もし行くことができるとしたら、そこで行使されるのは、階段を作る「力」と、別の入口を作る「破壊」だけである。

日時：2024年11月10日（日）14:00  
登壇：吉野鞆  
会場：ギャラリー北 西側通路・階段前  
\*予約不要・入場無料。

■関連プログラム2

## Aeffection 「壁の前／背景と演壇」

Aeffectionは、AffectとEffect（共に効果や影響に関する言葉）にAction（行為）を組み合わせた造語で、ある任意のパフォーマンスを共同作業に変換し、パフォーマンスし直すものです。身体と実存をテーマに展開される本展では、アーティストの（制作）行為が作品化されたものが登場します。作品となるために取り出され手続きとなった行為は、始まりや終わりが付き纏う事情を外在化してしまっているのかもしれない。そこで始まりの他者として、一対一のパフォーマンスを基本とする内田望美とともに、協働するための対話プロセスを得て、共同化する終わり方を考えるものです。

日程  
①内田望美＋吉川永祐 2024年11月20日（水） 14:00から  
②内田望美＋高橋順平 2024年12月 4日（水） 14:00から  
③内田望美＋川松康徳 2024年12月18日（水） 14:00から

※申込不要・参加無料

会場：ギャラリー内で協働のパフォーマンスを実施。

## 展覧会を迎えて

Co-programのプランを提出してから約1年が経ち、このたび展覧会が無事にオープンしました。アーティスト自身がキュレーションを行うスタイルの本展は、従来のグループ展とは異なる新たな雰囲気を生み出しているかもしれません。制作し表現をしていく中で、アーティスト個々のスタイルが研ぎ澄まされ、より明確に求められるのは必然かもしれません。しかし、私たちの存在がそうであるように、隣り合いながらも切り離せず、離れていても繋がりを感じられる—そのような予感を抱かせる展覧会になったのではないかと実感しています。切り出し、わかりやすくなることでアートが成立するわけではありません。隣り合うことで連想しながら、離れた空間を持続するニュアンスが、展覧会がひとつの身体のように、鑑賞者に寄り添う体験を提供できるのではないかと期待しています。

この企画に賛同し、参加してくれた吉川永祐、高橋順平、内田望美に心から感謝いたします。彼らの制作した素晴らしい作品を紹介できることを大変嬉しく思っています。また、最後まで企画を支え、共に伴走して下さった京都芸術センターの安河内宏法氏と黄宇曦氏にも深く感謝し、ここに書き留めておきたいと思います。（川松康徳）

京都芸術センターCo-Program 2024カテゴリ-B採択企画

# BODY BUDDY BABY

2024.11.5 TUE - 12.22 SUN 10:00-20:00


京都芸術センター ギャラリー北／南 ※入場無料

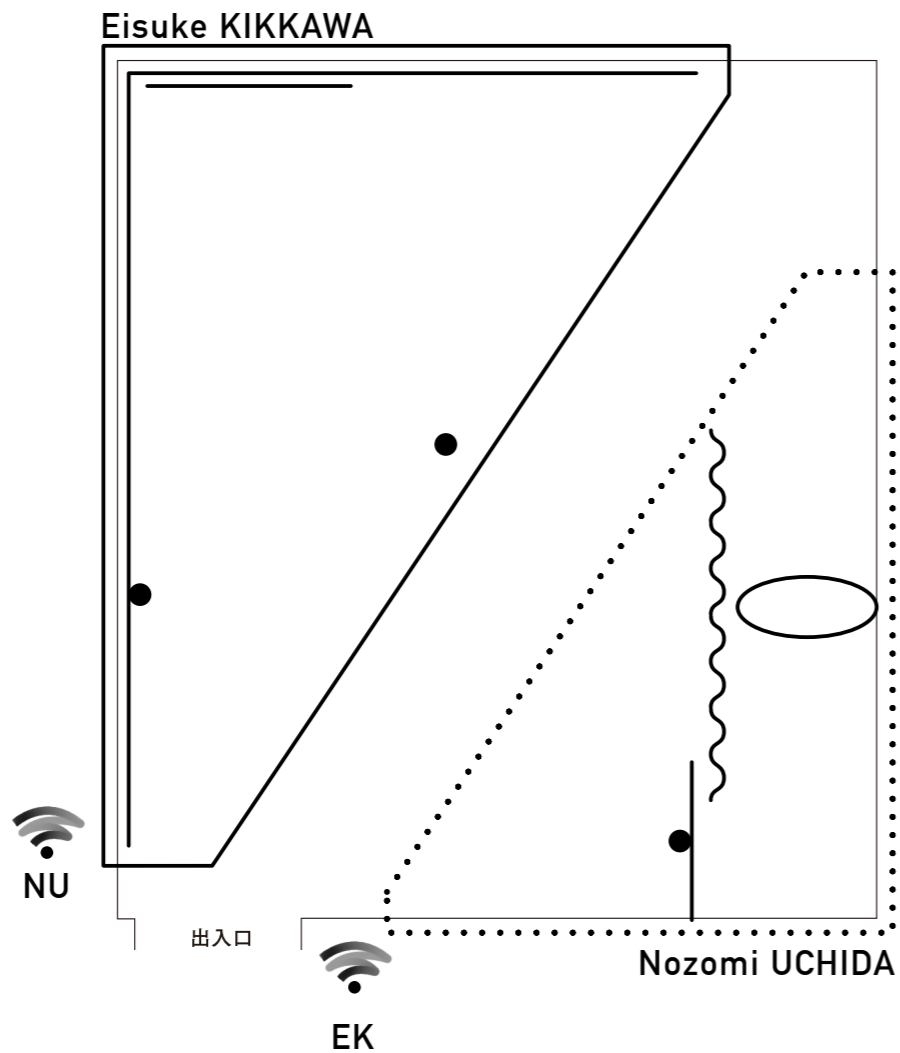
主催：川松康徳、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）  
協力：dabada, PUCAPUCA, AIR大原



ギャラリー北

# Gallery North

 オーディオガイド



## 吉川 永祐 [わかれたあとのからだ]

制作年：2024 素材：石、映像、石板

EK 協力：音声録音・編集／宮崎竜成 石材提供／石材荒谷商店、亀田萌理 レーザー加工／Kyoto Makers Garage

本作は、作者の身体と捨った石の痕跡として展示されています。石を磨く行為の反復は、行為者と対象の癖や特性など固有の特徴を浮かび上がらせます。石は、その耐久性と普遍性から「知覚できないもの」の依代として機能し、古くから墓として用いられてきました。私たちは石だけでなく、写真や形見などの物と故人とを結び付け、面影を感じ、不在の他者を思い続けているように思います。私はその営為に、複数に分かれた新たな身体を作り出しているような感覚を覚えます。

## 内田 望美 [とおくの (不)確かな やくそくを]

制作年：2024

NU 素材：紫根とカカオバターでつくったさくら色のバーム、あなたと私の肌と体温、交わされる(かもしれない)ゆびきり

協力：喜多村徹雄、足立雄亮、白田健人、ロイヤルホームセンターのなかむらさん、カーテンどっと通販の山下さん

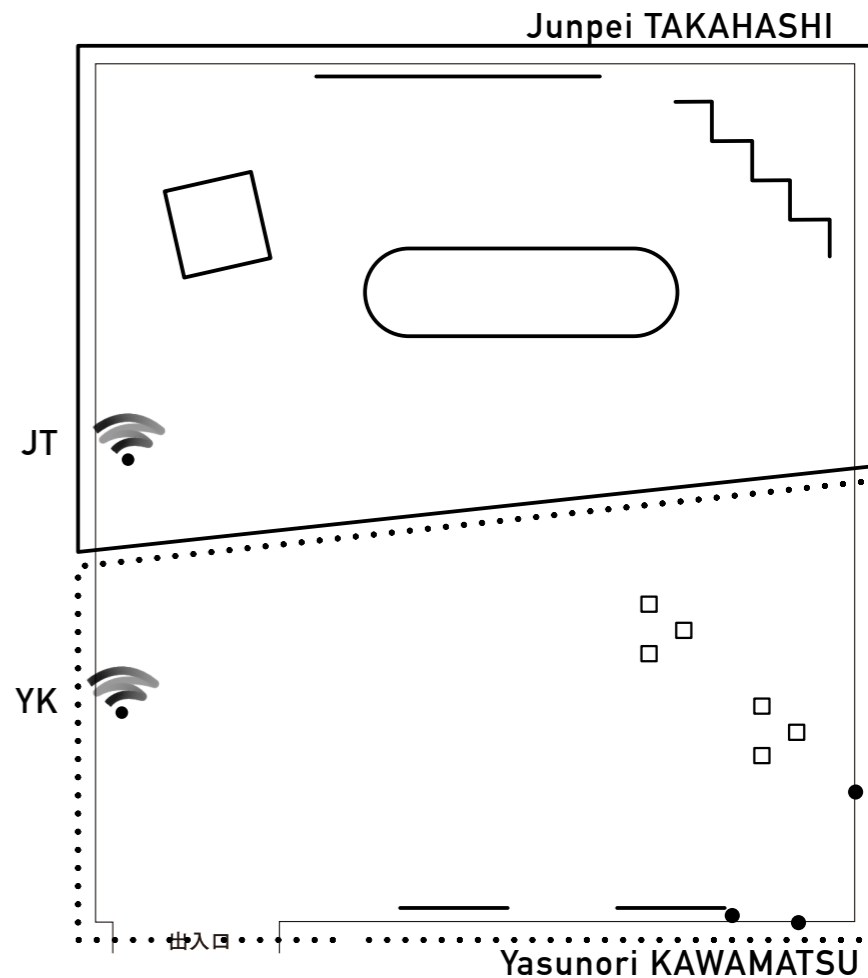
乳児期にみられる原始反射の中に、手掌把握反射というものがあります。赤ちゃんの手のひらに物や指が触れると、無意識に反応して握り返す反射のことです。触れたものを掴もうとする、それが生存に必要で本能的に備わっているということ、そして成長するにつれ、自らの意思で手を握るようになり、やがてはひとと手を繋いだり、握手をしたり、と、自分との絆から他者との絆を結ぶようになることが、とてつもなく感動的なことだとおもいます。

※パフォーマンス作品に関して

内田望美のパフォーマンスは金・土・日に行われます。平日は手紙をお持ち帰り頂けます。  
なおパフォーマンスで 사용되는紫根は、若干指に色が移る可能性があります。残るものではありません。

ギャラリー南

# Gallery South



## 高橋 順平 [GREAT WORKER]

制作年：2024 映像・インスタレーション

JT 協力：伊藤真生、高尾岳央、高橋陽平

9月まで物流倉庫で夜勤のパートとして働いていました。山のように積まれた荷物を1人で黙々とパレットに運び積み上げていると、自分の身体と労働者として必要とされる身体の差異を考えるようになりました。筋肉や足腰への負担、喘息の発症、大量の発汗、力むと漏れる声。私が辞めた今も新人が補充されて全く同じ労働をしているだろうこと。きっと私たちの身体は、その動作を自動化するよりはるかに安く簡単に、同じことができてしまって、それによっていつまでも無くならないこの身体の苦難をどう受け止めたらいのか私には分かりませんでした。

## 川松 康徳 [NARRATIVISUAL:C]

制作年：2012, 2019, 2024 映像・インスタレーション

YK 協力：Maria Ossandon Recart, La Ira De Dios

マリアと出会ってから4年後の2023年12月、私は全く別のプロジェクトでアルゼンチンのアントファガスタを訪れていた。長い道を、ガイドの四駆に連れられて走る。豊緑の林と褐色の土壌の景色を抜けて、標高3000メートルを超えると、喉が張り付くほどの乾燥と砂埃、ひどい頭痛が待っていた。溶け出した鉄分を含んだ軽石地帯の岩を叩くと、驚くほど高く垂直な音がする。帰路に着く道の、豊かに戻っていく緑が、人の住める気配に膨らむころ、私はマリアを思い出していた。彼女の曾祖父はどんな気持ちで下山したのだろうか。引き返す林にはどんな光が差したのだろうか？あの瞳は、成就しない希望ほどに綺麗だった。多分来年、私はチリに居る。